

すと消え度い様に存じます、幼い時母からホンのお針の持ち方丈けを習ひましたので、唯モウ單物一通り、拾一通り綿入一通り、繻絆に羽織袴、十徳鬼衣被布コート、洋服、チョツキ、ヅボン、マントトンビ、パツチ、猿又、足袋、手甲、脚絆、甲掛其他針に掛かる物は網抜き、雪駄の裏皮、疊の表替えもいたします「御寮人」まア、器用なお娘や事……ア、夫れから、是は無けら勤まらんと云ふのや無いけれど、マア有れば頂上と思ふて尋ねるのや。と云ふのは宅の旦那さんが、まことに陽氣好き、一寸一杯召上ると、一遍三味線弾きんかテナ事を、よう仰有る、貴女三味線はどうや「女中」マア御寮人さん、三味線の話が出ます度に、妾モウ穴が有たら這入り度い様な氣が致します、ホンの手ほどきをして貰ひました丈けでムりますので、唯もう地唄が百五六十と江戸歌を二百程上りました丈けでムります、夫れからマア長唄と常盤津、義太夫、清元、端唄、大津繪、とつちりとん、伊豫節、都々逸よしこの、追分、騒ぎ唄、新内、源氏節、チョンガレ、祭文、阿呆陀羅經、又鳴物も少々囃りまして大鼓、小鼓、大太鼓、メ太鼓、甲太鼓、長胴鼓、横笛、竹笛尺八、笙、箏、琴、琵琶、鼓弓、八雲、月琴、木琴、鈴チャンボン、銅羅、鈔、鑊、木魚、四ツ竹、半鐘、釣鐘、拍子木、鳴子、釋杖、法螺貝……「御寮人」まア何でも能けるのや事……「女中」若し子供衆が夜習ひでも遊ばす様なれば、卒兩乍らお手本位は書かして頂きます、字はお家流假名は菊川流でムります、算盤は四則から始めまして開立、開平まで、お手前は裏千家花は池の坊、盆畫盆石と香も少しは嗅き分けます、繪は狩野派、歌は

萬葉、句は蕪村の流れを汲みます、劍術は一刀流でムりまして柔術は澁川流、鎗は寶藏院薙刀は靜流、手裏劍は兵藤流、鎖鎌は山田流、軍學は山鹿流、忍術は甲賀流、馬は大坪流、鐵砲の作法は江川流、大砲の打ち方地雷火の伏せ方烽火の揚げ方……「丁稚」フワイ。番頭はん、御注進「番頭」何や吃驚するがな「丁稚」アノ女婢さんなア、豪い人だつせ、地雷火伏せて烽火揚げるや云ふてまつせ、貴方今夜の便所往きは甲兜や「番頭」阿呆云やがれ。もつと聴いて來い「御寮人」まアそんなお娘に居て貰ふたら私も安心やワ、それで貴方の生れは何處やね……「女中」私は、アノ京都の生れでムります「御寮人」良え處で生れてやつたんやナ、京は何處や「女中」寺町の満壽寺で……「御寮人」賑やかな處やないか。それで今でも御兩親は其處に居て、やのんか「女中」御寮人さん、妾は誠に運の悪い者でムりまして、幼い時兩親に死別れましたので、心齋橋の八幡筋に居ります伯父さんの世話に成て居りましたが、伯父さんはホン人の良え佛の様な人でムります、處が伯母さんと云ふのが根が他人の事として口で大きな事を云われますが、極くお腹の小さい人で、何やら油の中へ水が混つた様に、何かと顔で切て見せられるのが辛さに、斯様に御奉公をさして頂きます「御寮人」まア可哀相なお娘「女中」左様な譯でムりますので、お目見得の晩から泊めて頂きますと、縁が有るとか無いとか申しますが、何れ荷を引きに參ります節、一日お隙を頂くとして、今晚から泊めて戴き度う存じます「丁稚」へーイ、又御注進「番頭」コラ、そない大きな聲出すな、何うやつた「丁稚」番頭はん、あの女婢さん京都の人だす